

## “発達障害者支援講演会”の記録

主催：神戸市

日時：2008年7月23日（水）15：00～17：00

場所：兵庫県看護協会 2階 ハーモニーホール

講師：佐々木 正美 先生（川崎医療福祉大学 特任教授）

テーマ：「思春期・青年期以降の発達障害者への支援を考える～すべては正しい適切な理解から～」

※本文の無断転載・引用等は一切お断りします。また、本文は記録者による再現のため、内容についてのご質問等には一切お答えできません。

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました佐々木です。今日は発達障害の人の思春期・青年期ないしそれ以降の人々への支援を考えるという主題をいただきました。これは一言で語ることが大変難しいです。小さいお子さんも難しいですが個人差がまだ小さいので、ひとまとめにして、お話をややしやすいです。しかし、思春期・青年期になりますと、見事に発達成長されて社会適応していらっしゃる人と、いわば強いひきこもり状態になってしまわれた人、あるいは激しい不適応行動、日本では強度行動障害と言われたりしますが、普通の福祉施設では引き受けられず、厚生労働省が特別な手当を出してなんとか引き受けて欲しいと言わざるをえないほど不幸な酷い状態になってしまっている人と、千差万別であります。

おそらく、持って生まれてこられた特性と、どのような生い立ちを持っていらっしゃるか、それらの複合的なものによって、思春期・青年期あるいは成人期の状態は変わってくるであろうと思います。

繰り返し申しますが、見事に安定した社会適応をしていて、あえて申し上げれば、一般の平均的な成人よりもはるかに高い能力を社会的に発揮したり業績を上げていらっしゃる人も何人も存じ上げております。

ところが一方では、もう20年ないしはそれ以上ひきこもったままでいらっしゃるという人もいらっしゃるわけです。福祉施設でさえとても手に負えず、福祉施設と精神病院の保護室の間を行ったり来たりしながら、家庭が引き取れないのですから、なんとか病院と施設で対応を考えていらっしゃるというほど、あえて申し上げれば悲惨な人がいらっしゃる。それから、極めて稀ですが、どなたもご存知のように、大変不幸な犯罪を引き起こしてしまう人もいらっしゃるわけでもありますね。もう千差万別であります。

そういう人たちに何をどうしていくかという勉強会に今日来ていただいたとしましたら、まずはこの人達がどういうところに基本的な問題を持っていらっしゃるのか、なぜ私達はこの人達をいわばひとまとめにするように発達障害と呼ぶのか、発達障害というのはどういうものを指して言うのかというような基本をまずご理解いただけるように努めたいと思います。そして少し応用編の話もしていきたいと思ひまして皆さんにノートをお配りしていただきました。

発達障害の人の特性を TEACCH プログラムでは文化という言い方をします。発達障害の人が共通して持っているような特性があるから発達障害というわけでありませぬ。いろんな程度に、いろんなニュアンスで、みんな持っているような特性があるわけです。

この特性というのがどういうものなのか。

視覚的な情報への親和性が大きいということが発達障害の人の基本的な特性です。自由にお喋りしていらっしやるような能力の高い人でもこの特性はしっかりあります。たとえば多くの方はご存知かと思いますが、アメリカ・コロラド大学で教授をしている temple・grandy という方がいらっしやいます。高機能自閉症の人です。ところがアメリカに行きますと最高機能自閉症という表現をします。high-functioning autism ではなく highest functioning Autism。直訳すれば高機能自閉症ではなくて最高機能自閉症と言われるほど知能の高い自閉症の方がおいでになります。日本にもおいでになって、講演会をご一緒したこともあります。その temple・grandy さんが自らはっきりおっしやいます。自分は絵でものを考えます。視覚的に考えますと。言葉で物考えるのは非常に下手です。ですから言葉を絵にしなげら物事を考えています。temple・grandy さんは自分でこうおっしやるわけです。

絵にすることができない言葉というのは意味になりにくいんです。ですから、たとえば幸福という概念が自分にあるかどうかともおっしやるわけです。幸福というのは絵にならないですね。抽象概念と言ったりします。temple・grandy さんは幸福という言葉の意味をどのように自分なりに持つかということに大変苦労されます。そしてフレンチトーストを食べているときのあの気持ちと自分で決めていらっしやいます。

私達は幸福という言葉、概念をこんな決まりきった狭い概念にとらわれずに持っています。たとえば親しい知人、友人に何年ぶりかで久しぶりに会ったとします。偶然会ったにしてもなんでもよろしいのですが、お会いしました。「いやあ、しばらくですね。お元気そうでなによりですね。お幸せそうで。」「ありがとうございます。おかげさまで。あなたもお幸せそうじゃないですか。」お互いに幸福と言っているんです。例えばこういう会話を私達はしますが、発達障害の人は絶対しません。お幸せそうなんて何を意味しているんですか。おかげさまでなんて何のことですか。こういうことは意味にならないと言いますよ。私達はこういう意味不明のようなことを意味にしながら共感しあっているわけです。「先を急ぎますから失礼いたします」と言って別れます。「どうぞお幸せに。」「ありがとうございます。あなたも。お幸せに。」こんなことに何の意味があるんですか。

temple・grandy さんはおっしやいます。そんなに年中フレンチトーストを食べるんですか？幸福とは何ですか？幸せとは何ですか？あの能力の高い人だからそうおっしやられるんです。あんなに能力の高くない人の場合は、意味不明のまま、自分には意味がわからないけれど皆にはわかるんだということも思わないで、日々生きていらっしやる人が多いだろうと思います。

視覚的なこと、具体的なこと、個別的なこと、規則的なことがとても意味概念になりやすいんです。発達障害の人は、こういう領域のものをうまく見つけて社会に出て行かれたら、高い能力を発揮されていくんです。こういうものを見つけて、こういう世界を切り開いて、こういうところに進路を求めてということでもあります。

私、あるとき、自閉症に関するシンポジウムで司会をおおせつかりました。厚生労働省のお役人の方もいらっしやいました。自閉症の専門家もおいでになりました。そして当事者の代表でニキリンコさん、アスペルガー症候群、高機能自閉症と言われる人ですがご本人がいらっしやいました。そういう人たちが集まってシンポジウムをやりました。そのとき私は自閉症、発達障害の人は幸福や親切というような抽象的な言葉の持つ意味概念を把握したり理解するのに、いろいろ苦労なさっていますと言いました。テンプル・グランディンさんは幸福という言葉聞いてもわからないので、フレンチトーストを食べているときのあの気持ちというふうにして幸福という概念を固定的に、言ってみれば具体的、個別적으로ご自分で取り決めていらっしやるわけです。テンプル・グランディンさんから直接伺いましたし、本も読ませていただきましたというようなことをご案内しました。そうしましたら、ニキリンコさんが手をおあげになりました。ご本人ですよ。日本の代表的な能力の高い自閉症。翻訳家で、最近著作もなさいます。実は話し言葉よりはるかに文字言葉のほうに得意ですね。視覚的な世界であります。そんなお話をしていましたら、ニキリンコさんが「佐々木先生、ちょっとそれ違います」と手をあげておっしゃった。「テンプル・グランディンさんは朝食のフレンチトーストとおっしゃっていますよ」と。なるほど、これくらい具体的です。フレンチトーストを食べるときならいつでもハッピーというわけではないんです。我々はちょっと本を読んだり、ちょっと話を小耳に挟んだり、私はテンプル・グランディンさんから直接伺ったのですが、それでも小耳に挟むと、これくらい曖昧なことで用を済ませてしまうんです。どちらが良いとか悪いとか、正しいとか正しくないとかということではありません。私達ならフレンチトーストを食べているときに幸せとおっしゃっていますと言うくらいでいいんですけれど、ニキリンコさんからすればそうではないんですよ。朝食のフレンチトーストでなければ。昼食や夕食にフレンチトーストが出てきたって、それは幸福じゃないんですから。言われてみればそうかと思ったりします。ところが、それから数ヶ月して、別のところでニキリンコさんにお会いしたんです。ニキリンコさんとトークショーみたいなことをやりました。その会の始まる直前にニキリンコさんが私のところに訪ねておいでになって、「その節、失礼致しました。少し間違っていました。」とおっしゃったんです。私の気持ちとしては少しくらいどうでもいいと思っていますんですが。厳密なんです。具体的なんです。個別的なんです。テンプル・グランディンさんは休日の朝食のフレンチトーストとおっしゃっていると言うんです。なるほど。今日はお休みなんだ。ちょっと朝寝坊して、ちょっと手をかけてフレンチトーストを作って食べて、なんて幸せなことかと。私たちはそうとでも想像します。休日の朝食のフレンチトーストがハッピーなんですと。これはひとつの小さな例です。

発達障害、自閉症の人はこのように物事を非常に具体的、個別にとらえます。意味を付けていきます。あるいは規則や法則がはっきりしていることはとてもよくおできになります。ですから、数学や物理の世界で高い能力を発揮する人がいます。そういう問題は情報がしばしば視覚的です。視覚的なものは見たとおりでありますから。具体的で個別的なんです。こういうものをこの人達は得意とされるわけです。ですからジグソーパズルを組み立てるのは小さいときから上手です。一般の子供よりある意味では能力が優れています。少し大きくなってくると、ちょっとしたルールを覚えさえすれば、トランプで神経衰弱というゲームがとても強いんです。私も一緒にやってみますと、い

かにこちらがもの覚えが悪いかということがよくわかります。この人達はこんなによく覚えているんだと。トランプを一度表返して、そのカードがスペードの8だったとか、ハートの5だったとか、覚えたら最後、裏返しにしたってずっと覚えていられるわけです。私達はそれが時間とともに消えてくるんですね。いろんなカードをめくっているうちに、怪しくなってくるんです。このように消えていったり、怪しくなっていく我々のほうを正常と呼ぶんです。そして、それを忘れないでずっと覚えている人を障害と呼ぶんです。ある意味では多数派の横暴であります。あえて言えば。だから TEACCH プログラムでは発達障害は発達が遅れている人のこと、発達が劣っている人のことではありません。発達のパターンが異なっている人のことです。だから私たちと違うことは確かです。だけど、優れている、劣っているということではないんであります。このことをひとつ頭に置いておいてください。

目で見たものを見た通り、あるいはそれに準ずるほど具体的なことや正確なことはとてもよくおできるになるんですね。一度通った道の道順はいつまでも覚えてくれるとかありましょう。その裏返しのような想像力が良く働かないです。目で見て確認できないことに対していろんな意味づけをするんであります。見えないものあるいは話されたものに意味を見出していく力は弱いです。いろんな程度に確実に弱いです。この弱さを私達はわからないことがありました。

例えば、この頃ご本人が私のところに文章をたくさん寄せてくれます。私達はこういう特性を持っているんです、わかってくださいという意味でいろいろ教えてくださるんです。会社にお勤めの大変高機能の女性の方がおいでになります。その人が、私の家族のホームページの掲示板に寄せくださった文章の中から一部お話しします。私は話し言葉が苦手です。たぶん日常生活では話し言葉が苦手な人のように見えないほど、普通にお喋りされていると思います。文章ならこんな見事にお書きになるんです。私は話し言葉が苦手です。発音も抑揚もそれぞれ違う上に、使われる単語の種類や物事の形容の仕方もまちまちだからです。だから、いったい相手が何を言おうとしているのかを理解するのが大変難しいです。話が長くなると更に困難ですとおっしゃるんです。話し言葉の場合には耳にした言葉の意味を正確に把握しなおす。皆さんは、私がお喋りしているのを聞きながらこんなことをしていらっしやらないでしょ。耳にした言葉の意味を把握しなおして、一定期間、頭の中に記憶して分類しなおしておかなければいけないのです。こういうご苦労がわかりますか。しかもその間に自分が相手に向かって何をどう答えるかということを考えておかなければなりません。話し言葉のやり取りは非常に大変です。能力が高いから、こうやって自分で自分を整理していらっしやるんですね。発達障害、自閉症、アスペルガーではない他の人は、こんなことに自分達ほど大変なことをしていないなとわかってこられるわけです。

テンプル・グランディンさんは自分の国の言葉を第二言語だとおっしゃっています。第一言語は絵です。絵が一番わかりやすく、ついで文字、一番わかりにくいのは話し言葉ですとおっしゃるんです。大学の教授で講義をしていらっしやいますよ。その能力の高い人がそういう言い方をするんです。やはり驚きますね。自分の国の言葉が第二言語だとおっしゃるんです。

皆さん、第二言語をお持ちですか。私達日本人はある意味、いろんな程度に第二言語を持っています。誰もが中学校・高等学校と6年間、英語を勉強してきました。大学に行かれた方はその後更

に2年間、勉強されたかもしれません。ずいぶん英語をやってきました。ですから、私達はいろんな程度に英語を第二言語として持っているでしょう。文字で書かれたものと相手が話したことと、どちらが理解しやすいか、どれくらい理解力が違うかということもちょっと考えてみてください。書かれているほう、目から入ってくるほうがやさしいでしょ。第二言語はそういうところがあるかもしれないですね。テンプル・グランディンさんがそういう言い方をされているのはとしました。第二言語は話すことより聞き取ることが難しいです。第一言語は話すほうが難しく聞くほうがやさしいんです。例えば幼い子供がかたことのお喋りを始めます。かたことのお喋りを始めた幼い子供というのは、親が話すことのほとんどをたいていわかっています。理解する力があります。喋るほうはまだとつとつとして幼いです。ところが第二言語は反対なんです。喋るほうがやさしくて、聞き取るほうが難しいんです。

昨年の三月、ボストンで TEACCH プログラムの創設者、エリック・ショプラー先生が亡くなったので、追悼のシンポジウムに招かれて行って参りました。四人のシンポジストが、研究から実践へ、実践から研究へというテーマで、ショプラーの功績を称えるというシンポジウムでした。研究一筋でも、ただ単に実践しているだけでもないんです。しっかり研究して実践に移し、実践した結果をまた研究に戻すということ、これほど見事に自閉症の世界でやった人はいないでしょうという趣旨のシンポジウムでした。四人のシンポジストの一人は英国人、二人はアメリカ人、私が日本人です。他の三人は英語が第一言語なんです。私だけ英語は第二言語であります。不自由ですよ。バイリンガルと言われる程、外国語が達者な人にとってはどうということもないかもしれませんが、私には大変でございます。最長 15~20 分を超えない範囲内で、今のような主題に沿って、ショプラーの功績をそれぞれが発表するんです。プレゼンテーションするわけです。それが終わると、一人がチェアマン（議長）、座長になって四人で話を交わしていくんです。最初の 15~20 分以内で話すほうは決して発音が上手ではありませんが、私もあまり困難はないです。私が思ったことを思ったとおりに話をするということはそれほど大変ではありません。15分、20分のことですから。四人がその話を終えた後に一時間半から二時間近く、自由なやり取りがあるわけです。聞きながら喋るんですよ。第二言語の大変さを私は感じました。一人は英国人、二人はアメリカ人。英国人とアメリカ人の英語は違いますよね。その意味を把握し整理して頭の中にきちんと置いておく努力をしなければいけません。私の場合、第二言語ではそういう努力をしながら一方で自分がどう喋るかということを考えておかねばならないのです。第二言語の大変さをしみじみ感じながらシンポジウムに出ていました。テンプル・グランディンさんはこういうことを言っているのだと思いました。私は自分の国の言葉ならこんなに不自由ではない。自閉症、発達障害の人は自由にお喋りしているように見えて、自分の国の言葉にこういう不自由さを持っているんです。

大変入学偏差値の高い大学に入学され卒業された人も同じです。今日の午前中、岡山市で岡山県の自閉症協会の人達が主催された勉強会でお話して来ました。岡山県発達障害支援センターの人達もいらしてました。高機能の発達障害者の就労支援を一生懸命なさっています。京都大学、大阪大学といわれる人は何人もいらっしゃる。就職に挫折する、就職できない人達を支援することがいかに大変か。発達障害の人は理解してもらうのが大変なんです。入学偏差値の高い卒業生だから他の

ことも高いレベルでできるかというところではないんです。発達障害は発達障害なんです。入学試験や学校の勉強がよくできる方は自閉症、発達障害の人の中にはよくいらっしやいます。そういう人は視覚的な世界、文字の世界、具体的な世界、規則や法則がはっきりしている分野の学問を究めていきます。

発達障害の人にとって得意な分野というのはいくらもあります。ところが一般の社会生活は具体的でも規則や法則がはっきりしているわけでもありません。ほぼすべての時間で、すべての問題で応用力を試されるわけです。試されるというより応用力を必要とするわけです。発達障害の人はこの応用力が非常に困難なんですよ。記憶通りにならできますよ。ですから私達にとっては神経衰弱になりそうなほど大変な神経衰弱のゲームに発達障害の人は強いんです。よくおできになるんです。私達は大変なんです。ところが私達、あるいは幼い子供にとってもやさしい、かくれんぼや鬼ごっこといった遊びを発達障害の人はできません。鬼ごっこを楽しんでいる自閉症の子どもを私は見たことはありません。瞬間瞬間、応用問題ですから楽しめないですよ。誰が鬼になった、何ちゃんは走るのが速いんだ、今度の鬼は速いんだとか、今度の鬼は走るのがゆっくりだとか、その鬼が今どちらの方向にどのように走っているから自分はどちらの方向に逃げておけばいいかというのにはパターンがないんです。決まりはないんです。二度と同じ場面はないんです。すべての時間を臨機応変に応用的に振る舞うわけです。発達障害の人たちはこれができないわけですよ。発達障害の人は答えが決まっていなくてやっていくのが非常に困難です。多くの仕事にはそういう側面があります。やさしいとか難しいという問題ではありません。ほとんど想像力、イメージの世界です。発達障害の人の特性をご理解いただけましょうか？

応用力が困難なのは中枢神経系の統合力が乏しい、あるいは同時相互機能が弱いからです。私達は脳の中に様々な知識、経験、技術を蓄えて持っています。それを必要なときに必要な組み合わせで発揮しているんです。その必要な組み合わせを瞬間瞬間に発揮していくことがひどく困難です。瞬間瞬間を生きるのではない生き方を好みます。この路線、このパターン、この規則・法則に沿ってと。能力の高い人はより能力の高いことを目指していろいろありますけれども、私達はこういうところがどれほど違うかということを知ってあげませんと発達障害の人をひどくひどく苦しめてしまいます。

近年、大学生や大学院生、いろいろご苦労があるでしょうけれど一般の職場にしっかりお勤めになっている方、そして自分のことをアスペルガー症候群だとわかっている人から、いろんなご相談を受けます。最近、本当に共通したようなことを、共通した語り方でおっしゃる人に何人か出会いました。学校あるいは職場で、何人かの同僚や仲間などいろんな人と、話し合いや親睦会、食事会をすると、いつも自分が浮き上がっていることがわかり辛いですと。浮き上がっている自分がわかるけれども、上手に調整できないんですという意味のことを何人もの方がおっしゃいます。自由に話をされていらっしやるんですよ。佐々木さんならこういうことを言ってもわかってくれるでしょうと告白してくださるわけです。お辛いだろうなと思って聞きます。日本流に言えば一流の大学の卒業生でいらしたり、一流の大学の在学学生でいらしたりするほど、ある種、知的能力が高いですから、どんなふうに浮き上がっているのかということも上手に説明してくれます。こういう言い方をさ

れる人は割と多いんです。皆があることを話題にしながらお喋りをしています。その話題を理解し記憶し、そして自分がそれに対してどんな意見を差し挟もうか考える。そうすると考えが三つも四つも浮かんできてしまうと言われます。これは何人もの方から聞きました。いくつもの考えが浮かんできて、どの考えを採用して、どの意見を喋ろうかなと思う。考えていると話題がどんどん先にいって、それらの考えは役に立たなくなる。そうならない内にその中の一つの考えを選んで喋ろうと急ぐと、見当違いと言いましょか更に浮き上がるようなことを言うてしまうことが時々あるいはしばしばあるんです。皆の話題からひどくずれないように浮き上がらないようにとよく考えて、いくつもの考えの中からどれがいいかすばやく考えるということができない。急ごうとすると間違いをしばしばやる。後で、あんなときにあんなことを言ったらまずいんだよねと自分で自分に言い聞かせる。能力が高い人はこういうことで苦しんでいらっしゃるんです。どうしてあっちのことを言わなかったのかなどと後から思ったりする。大丈夫かなと考え過ぎると、皆の話が先にいってしまっ、その答えはもう古くなってしまっ。先生、こういうことをわかってくれますかと言われまっ。たまたま一人の人から言われたんじゃないんですよ。三人も四人もの人から同じようなことを同じように言われる。知能の高い発達障害の人は、知能が高いというなりにひどく苦しんで困ってらっしゃるといことがわかります。

年齢が小さいときには、こんなことで困っていると言わないで、わあっと言って行動を起こしたりしています。我々には瞬間的な判断というより衝動のままとも見えるような様子で反応します。もっと酷い不適應であります。

大きくなって能力が高くなって、いろんなことがわかるようになってきます。けれども発達障害でいることに変わりはないわけです。こういうことで苦しんでいらっしゃるわけですが、周りにはわかりませんよ。どうしてあんなところであんなことを言ったのと言われることがあるし、言われなくても自分で思って、深く悩んでいるんです。

ここでほんの少し解説をはさんでおきます。我々は、いくつもある考えの中からひとつ選ぶのですが、瞬間的にやっているんです。考えて選んでなんかいないんです。私がみなさんにお喋りしています。このお喋りをするために無数の考えや言葉が頭の中に浮かんでいるんだそうです。脳科学者が教えてくれました。自分では意識できません。たくさんのアイディア、言葉遣い、意味概念を自分の知識やかつての経験の中からぱっと瞬間的に取り出して、瞬間的に要らないものをみんな捨ててくれるんです。前頭葉、前頭前野というところがそういう働きをしてくれるんです。まあまあ適切な言葉を次から次へと一時間も二時間も繋ぎ合わせて話し続けていけるのは、前頭葉が、たくさんの言葉やアイディアを自分の知識や経験の中からピックアップして瞬時に要らないものを切り捨てるという繰り返しをずっと継続してやってくれるからです。前頭葉がいきいきとよく働いてくれているうちはいいです。しかし、少々お年を召してくると前頭葉の働きが少し鈍ってきます。記憶や知識が消えるのではないんです。だけど年をとってくると、取り出して要らないものを切り捨てるという作業に時間がかかることがあります。そうするとアーとかエーとかウーとかが長くなるんできると言われました。家内はまだあなたの話を聞いていてアーとかウーがそんなにありませんねと言っています。前頭葉がひどく衰えているわけではないかもしれないと教えてくれるのであり

ます。

発達障害の人はエーとかアーとかウーとか言いながら、考えているわけではありません。そんな声も出さないで考えているほど考えているというより考えているという意識を持ってやっているかどうかもわからないんです。でも、発達障害の人の言うことを聞くと、どれが良いかなと一瞬一瞬いつも思っているらしい。こう言おうと思っても、待てよ、とんでもないこと言っちゃわないだろうなど。いくつものことが浮かび上がってくるからなんです。脳科学者に言わせると、私達も浮かび上がっているんだそうです。だけど瞬時にして要らないものを捨ててくれて、そう間違いのないものをちゃんと残してくれているんだそうです。

私たちは自分の脳でも体の他の部分でも、健康に働いているときはそこが働いているという意識をほとんど持ちません。不思議なものですよね。その働きがどうかということを意識したときには、たいていその病気であります。心臓は一刻も休みなく拍動し続けてくれています。心臓が動いていると実感されたら、それは心臓の病気の人です。不整脈とかね。心臓が正しく元気に健康に動いている人は心臓の動きを感じとりません。胃でも腸でもそうですよ。ここに胃がある、胃が重いか痛いと思ったら胃の病気です。腸でもそうです。脳が充実して重くなったとお感じになったら脳の病気ですから。健康なときは脳が重いだの働いているなどと感じないんですよ。前頭葉が健康にいきいきと働いているときはそういうことを意識しないです。

ところが発達障害の人のかなり多くが、高機能であればあるほど自分でそういうことがわかるんですね。そして、一般応用的な場面でそれが難しくなるわけです。たとえば、学校の試験などの場合は、知識などがたくさん浮かびあがってくる必要はないんです。一つ二つの正しいものを即座にこちらだとわかればいい。ですから、そういう試験はできる人がたくさんいるんです。東京大学でも京都大学でも神戸大学でもどんどん受かっていかれるんです。卒業される人もいらっしゃいます。だけどそれは日々の応用的な生活をする上で直接的に役立つことではないです。間接的には役に立つでしょうけれど。ですから学校の勉強がよくできるということと、IQには直接関係しない脳の前頭葉機能の働きで日々の生活を適応力良くやっていけることには大きな落差があるわけです。発達障害の人はそこでいろいろ苦労していらっしゃる。

だから簡単に言いますと、発達障害の人の特性の最も中心的な部分は脳の働きを広く同時に機能させることが苦手だということです。あるいは瞬間瞬間、応用的に機能させることがとても苦手なんです。脳の狭いある部分とその周辺だけを活用させればいいという場合には、この人たちは高い能力を発揮されるんです。どの部分の働きが弱いとか悪いというのでは基本的にはないんですね。あっちとこっち、こちら側と向こう側を繋ぎ合わせて、適切に働きを作り上げていくということが苦手なんです。脳のチームワークを結成することが苦手と申し上げるとわかりやすいかもしれません。

スポーツのチームに例えると、もう少しわかりやすいかもしれません。発達障害の人の頭の中には、優れた選手がたくさんいるんです。しかしチームワークがうまくいかないとお考えいただいてもいいです。

野球に例えて申します。試合前にチームの代表的なホームランバッターを二、三人選んでホーム

ラン競争をされると、発達障害の人はホームランをぼんぼん打たれる。しかし試合になって打てるかということ、今度は相手がありますから簡単にはいきません。ホームラン競争はホームランをたくさん打つことを競うものですから、味方の選手がホームランを打ちやすい球を投げしてくれるわけです。それをぼんぼん遠くに飛ばす技術があれば、ホームラン競争としてやっていけるんです。しかし試合になりますと相手チームはピッチャーとキャッチャーが協力しあって、どこにどういう球をどういう手順で投げるとバッターが打てないかということを考えて投げてきますから、バットを振る力が強いだけではホームランは打てないであります。

試合と練習では違うんであります。いろんな意味でですね。発達障害の人は基本的には練習のような脳の働きはとても良いです。それを一般生活、職業生活なり家庭生活に、いかせるようにうまく導いてあげることが思春期・青年期以降の発達障害者支援における私達の役割であります。そこがなされないと駄目なんであります。

サッカーのチームにたとえてもよろしいです。良い選手がたくさんいるんです。だけどサッカーは良い選手がたくさんいるだけでは勝てません。私はサッカーには詳しくありませんけれども、中田選手のような司令塔がチームの中において全体の指揮をとって、どの選手がどこでどういう役割をして、どのようにしようかということを経理やコーチ、司令塔が臨機応変にまとめてくれなくては勝てないです。良い選手を集めただけではですね。PK戦などになったときには、単純に良い選手をそろえておくだけでかなり得点をとれる。だけど、発達障害の人は臨機応変、自由自在に動いて良い活動をするということが苦手であります。いろいろと比喩的にお話しますが、発達障害の人をよりよく理解してあげていただきたいから、こんなことを申し上げているんです。発達障害の人は、てきぱきと臨機応変に応用力を発揮するという場にいたら絶対駄目ですね。

ノースカロライナに行きますと、図書館で働いている自閉症の人は必ずいます。どの図書館にも必ずいます。そして非常に高い能力を発揮してくれますと誰もが言います。図書館のような仕事ですね。そうだろうと思います。細々としたことを説明するまでもなく、すぐおわかりになるでしょう。書棚に並んで整理されている書物の順序をよくおわかりになる。しかも記憶力が良いですし、物事を正確にするのが好きでありますから。具体的でいいんですよ。

ところが書店でも同じようにいかかというとなかなかいかないんです。どのようにレイアウトすると本がよく売れるかということを考えるのは、発達障害の人は極めて苦手です。こういう本は隅の方でいい、こういう本は中央に置こう、この本は特に平積みで置こうとか。いろんな読者やこの町の人々の心理を読む。こんなことなどは難しいですよ。こういうことができなくてはいけない。

私の知っている青年が大学を卒業した後、税関にお勤めになったんです。どこの税関かというのはプライバシーがありますからあまり触れないでおきます。非常に厳密な仕事をされました。この人達は手抜きをしないですからね。税関で人が通り抜けていくのを非常に厳密にチェックする仕事をしていたんです。遅いけど正確なんです。だから一番違法をピックアップされました。大変大きな業績を収めて何とか賞というのももらって、素晴らしかったんですよ。海外旅行されて日本の税関を通過して帰ってくる時、どの係員の列が空いているか混んでいるか見て、あちこちうろろします。その青年のところは鞆を開けてしっかりチェックしますから、進み具合が非常に遅いです。

その代わり違法を摘発するのは最高だったんであります。その業績が認められまして、一時どこかに転勤した後に、ある地方の町の税務署署長に抜擢されたんです。そこで大混乱が起きました。結局、退職されることになって、不幸なことでした。

発達障害ということをして人事担当の人も含めて周りの人にしっかりわかってもらっておかないといけません。署長というのは、鞆の中身だけを毎日毎日チェックするような仕事ではありません。こういう人は、同時相互機能、つまり、あっちこっちたくさんを同時並行的に考えながら業務を進めていくことが苦手ですよ。

同じようなことがスーパーマーケットで働いていたある青年にもありました。決まったパターンの仕事なんですけど、とても良い働きをするので、ある町の郊外に新しい店がオープンするときに、その店長に抜擢されたら大混乱を起こして駄目になってしまったんです。

同時相互機能を必要とせず、一定の路線で一定の法則をもとに一定のパターンで、順序がはっきりしているところで働かれたら、しばしば高い能力を発揮していかれます。おわかりいただけましょうか。

発達障害の人は関心や興味が狭いところに強く向かいます。広く弱いのと狭く強いのと、どちらが良いか悪いかと聞かれたら私たちは簡単にはなんとも言えないですね。どちらが良い悪いではありません。

アメリカ・ノースカロライナ州には公立学校の一般生徒たちに発達障害のクラスメイトのことをよく理解してもらうための15分間ほどのビデオテープがあるんだそうです。最近できたもののようで、私はまだ拝見したことがありません。僕たち私たちのクラスには、何くん、何さん、発達障害、アスペルガー症候群といわれる仲間がいるんですよ。みんながよく理解して協力し学びあっていきたいから、わかって欲しいという意味でビデオテープを見せて、その後、先生が解説するようになっているんだそうです。そのビデオテープをいただけないかなと思っているんですが。

そのビデオテープの最初に出てくるのがニュートンだそうです。そしてモーツァルト、アインシュタインが出てくる。なるほど言われてみれば、こういう人たちには突出した能力があったけれども、ずいぶん引っ込んでいるところもあったんでしょう。発達が遅れているのではなくて、でこぼこで不均衡です。

私はニュートンの業績や伝記を読んだことがありません。モーツァルトはあるんであります。モーツァルトが亡くなったのは35歳ですか。埋葬に付き合った人は神父さんと墓守だけだったそうです。墓堀というんでしょうか。お墓を掘る人。そして神父さんとお二人だけ。その他の誰もモーツァルトの死を悼んだり悔やんだりしてないんであります。まあ、みんなにあきれ果てられたんでしょうね。膨大な借金を抱えて返す意思もない。たしか本にはお金を借りるということとお金をもらうということとの区別もついていないような人だったと。でも作曲するにはそういうのはどうでもいいことなんじゃないでしょうか。能力の高い低いではなくて偏りだというのはわかりやすいです。ただお金を借りるということとお金をもらうということの差がわからないようでは一般社会生活はできません。

モーツァルトが本当はどういう人だったかというのは私にはそんなにわかりませんがね。ニュートンもアインシュタインも、私は知りません。けれども、あんなに突出した能力を持っていらっしやっただから、ひどく引っ込んでいるところもあったんしょうとやはり思います。並みということは幸福なんでございます。バランスが良いということは。バランス良く生まれた子どもに突出したものを要求するという、まあ欲の深いご両親がときにいらっしやるんですよね。今度は、でこぼこのある子供に、とんがったところはそのまましておいて、落ち込んでいるところを底上げしようとして無理をいらっしやる欲の深い方もいらっしやいます。どっちが良い悪いはもう選べないんです。仕方がないです。

ノースカロライナのVTRでは、ニュートン、モーツァルト、アインシュタイン、ビルゲイツ、こういう人が次々に出てくる。発達障害が悲しいとか辛いとか不幸だとか駄目だとかいうことはまったくないんだということをしっかり教えるために、そういう人に代表的に出てもらっているんでしょうね。もし、こういう映像を見たとしたら、発達障害に生まれなかったことが残念だと思われませんか。何人かいる子どもの一人くらいは発達障害でいてくれたら良かったのと思わないでもない。人間とは、わがままで贅沢なものであります。発達障害の子どもを育てそこなうと発達障害は嫌だ嫌だと言っている。うまく育てになった方は素晴らしいかとたぶんおっしゃっていると思いますよ。

でもこういうところをよくわかって、育てになれば育てやすいんです。わからなくてもいいんです。わからなくてもいいですから無理、難題、注文をあれこれおっしゃらないと、発達障害の子達はだいたいうまく育っていきます。無理、難題、注文をおっしゃると本当にいけません。なによりもいけないのは叱ること、怒ることです。この子供達は怒られなければならないことをしていませんよ。怒られなければならないのは悪意を持って悪をすることなんです。知らないでやってしまうことは、そんなことをしては駄目ですよ、こうしなければいけませんよと注意は受けたほうがいいです。注意は必要ですけども、腹を立てられて叱られるような問題ではないですよ。そこを叱っている人がいるんです。そして二次障害を強くしてしまうということがあります。

興味が狭いところへ強く向かいますから、そこを良い方に向けてあげて、うんと力が発揮できるように伸ばしてあげていただきたいと思います。興味関心が向かないところを伸ばそうなんて無茶なことをなさらないように。それはできないんですから。

予期しないことが起きるのがとても辛いようであります。私たちの想像を超えるようです。この前、英国自閉症協会の方がお作りになった本を送ってくださいました。会員向けの本のようにも思いました。その本の中でも、自閉症、発達障害の人は予期しないことが起きることがどんなに恐怖なのか、苦痛なのかをみんなで理解しあいましょうと書いてあるんです。そして、当事者の言葉がちゃんとそこに紹介されていました。ある方がこんなことをおっしゃっていました。私は次の瞬間何が起きて何が起きないのかということを考え続けるだけで、疲れ果てていますと。本当なんです。私はその本をいただいてから聞いてみたことがあるんですが、多くの方がそうだと言います。いやあ大変ですよ。考え続ける、恐れ続けると言ってもいいとおっしゃる。だから、学校でも職場でも作業所でも、あえて申し上げればご家庭でも、スケジュールをしっかりと予告しておいてもらえる

と安心する。予定表、日程表、スケジュール表などで予告されていないところで発達障害の人が安定した適応をしているということはまずありません。絶対ないです。そういうときは仕方なく無理に自分で自分のスケジュールを作るそうでもあります。作らざるをえないわけです。私たちは昔、この子はパターンにこだわるなどと言ったものです。そうでなければ不安で仕方がないですから。そのとき、私たちは知りませんでした。今はそのような誤解をしません。予期しないことがおきないように。いいでしょうか。

なにごとにも肯定的にこうなさいと言ってあげると意味になります。否定的に言われると意味がわからなくなる。発達障害の子供達をずっと見てこられた方はよくおわかりでしょう。そんなことをしちやだめと言って、それをやめる子なんてほとんどいません。なぜかと言えば、こんなことしたら駄目と言われただけでは、どうしたらいいかわからないからです。こういうことも大きくなって安心して自由に言える相手を見つけると自分でおっしゃいます。だから駄目と言うのではなく、こうするのがいいんです、こうなさいと言ってあげるほうがいいんです。それは無理難題では駄目ですけどね。上手な人は否定的にものを言わないで肯定的にものをおっしゃる。短い言葉で具体的に。

さらに発達障害の人の大きな特徴は忘れることができないということです。チャールズ・ハートという人の有名な言葉です。アメリカ自閉症協会の理事の方で、広報を担当しています。日本にも何年前においでになりました。『Without reason』という本をお書きになりました。Without reason、理由もなく、理由がわからない。なぜこの子はこうなのかという理由がわからなかったという意味であります。『見えない病』という題で、日本語に翻訳されています。良い日本語題だと思います。チャールズ・ハートさんは息子さんが自閉症です。アメリカ中の自閉症の人の施策について全米自閉症協会の理事として、いろいろお仕事をなさっているんです。そのチャールズ・ハートさんが自閉症の人の特徴を一言で言えば物事を忘れることができなくて苦しんでいる人と言っておられる。簡単に言えばPTSDを抱えやすいということです。傷つけられたことが消えないんです。物事を忘れることができない。私たちや皆さんは子供の頃からずっといろんな苦しみ、悲しみ、怒りを無数に経験してきました。だけど、ほとんどは月日とともに消えています。消える幸せ、忘れる幸せ。発達障害の人は消えない。チャールズ・ハートは忘れられない苦しみとおっしゃるんです。わが子を身近で見守ってきた。多くの自閉症の人に出会っていろいろ努力してきた。その中で発達障害の人の最も大きな特性の一つに物事を忘れることができないという苦しみがあります。だから傷つけては駄目だということでしょう。叱っては駄目なんです。なんでもほいほい言いなりになればいいということを行っているではありません。そんなことをしちや駄目、こうするのがいいんです、可能な限りこうなさいと具体的な言い方をしながら。

簡単に申し上げれば、思春期・青年期以降の様子は、それまでにどれだけ本人の気持ちが傷つけられてきたかこなかったかで決まります。

ひきこもりの人、とても強い強度行動障害といわれるような状態になっている人、極めてまれですけれども、大変に不幸な犯罪をおこしてしまう人、高い能力を安定した状況や環境でうまく発揮できるように育てられてきた人など様々ですよ。千差万別であります。

ここまでお話ししてきたことだけで申しますと、発達障害、自閉症の人は話し言葉の世界が苦手  
で、文字や目で見える世界のほうが好きなわけでしょう。そうすると口数の多い人を嫌いますね。口  
数の多い人の傍にるのが嫌だと言います。しかもそんなこととしては駄目と否定的なことをたくさ  
ん言う人は更に嫌です。その上に怒りっぽい人は最悪の悪であります。PTSDにしてしまう。口  
数が多くて何かを否定的に教えようとしてよく腹を立てている人。不適応状態を引き起こしている  
人の保護者やこの子たちが出会ってきた先生たちは、見なくてもどういう人かだいたい見当がつき  
ます。発達障害の子供を上手にお育てになる人は、弱点や欠点を無理に直そうとしないで、だらだ  
らと長い言葉であれこれ説明し過ぎずに、短い言葉で具体的にどうするのがいいか肯定的な側面を  
強調してあげながら、穏やかにものを言って長所が伸びていくようにしてあげる。叱らないでい  
るだけでいいんです。

十数年前に、NHKスペシャルという番組のためにNHKが私が主治医をしていた少年を取材に  
来たんですね。そのときには行動特性からADHDと言われていましたが、実際はアスペルガー症  
候群の特性をしっかりと持っている子供でありました。横浜の市ヶ尾小学校の特別支援学級と普通学  
級の間を行き来しながら教育を受けていたんです。クローズアップ現代という番組で、その何週間  
か前に、同じようなテーマを扱ったら大変な反響だったので、その反響にお答えするという意味で、  
NHKスペシャルという番組を追加して作るようになったそうです。そのとき、私はまったく知り  
ませんでした。横浜市にNHKから打診があって、あそこの学校は良い学校で、良い先生がいて、  
支援学級と一般学級の交流も良いので、あそこにいるお子さんで選ばせてもらったらどうかとい  
うことになったんだそうです。そして、小学校3、4年のある子供が選ばれたんです。そして撮影が  
始まってしばらくしてから、この子の主治医は佐々木だということがわかって、NHKが私のとこ  
ろに取材に来ることになったんです。私はそういう番組がそのように進行しているということを最  
初は知りませんでした。その子に最初にお会いしたときのことをよく覚えているんです。小学校1、  
2年のときですが、お父さんとお母さんがお連れになったんです。よこはま発達クリニックとい  
うところに非常勤で応援に行っているときです。聖マリアンナ医科大学の小児科から紹介されておい  
でになったと思います。まあ、それは多動で、衝動性が強くて、言っていることの意味をなかなか  
素直に受け取ってくれない難しい子供でした。それは見るからにわかりました。お父さん、こうい  
う子どもは叱って育ててはいけませんよ。何事も言って聞かせることは大切ですけど、叱らな  
いんですよと申し上げたら、お父さん、きっと開き直るみたいになられました。今日で言うモン  
スターペアレンツかなと一瞬思いましたが違いました。でも、くっかかるようにして、「先生、お  
言葉ですけどね」とおっしゃるんです。丁寧な言葉で怖いんです。この子は何年も何年も叱  
りに叱って、頭やお尻をぶつだけぶつて、一生懸命育ててきて、まだこの有様ですよとおっしゃ  
ったんです。この子を叱らなかつたら、どんなに酷いことになると思いますか。先生、なった結果の  
責任を取ってくれますかとおっしゃったんです。これは大変なことだと思って、責任は取れませ  
んけど私の考えで申し上げますと叱らないで育てるのがいいですよ。好き放題させるという意味  
ではありませんよ。そんなことしちゃ駄目だということを、くどくどと、だらだらと強調しないで  
こうするのがいいんだということを短い言葉で言うとお育てになるのがいいですよ。担任の先生に

もクラスでどんなに不適應で酷い状態を示しても叱らないでいただくようお願いしようと。先生も協力してくださった。お父さん、最初は協力する素振りもありませんでしたが、長い時間をかけて不承不承説得いたしました。一週間だけでいいからと期限付きをお願いしました。一週間だけでいいから一度も叱らないで、次回、一週間後にお見えいただけませんか。何ヶ月も何年もとは申し上げません。一週間でいいですから。なんか慚然としてお帰りになりました。一週間後にお会いしたとき、お父さん、診察室に入ってくるなり最敬礼されたんです。何かと思ってびっくりしました。先生、本当に失礼致しました。専門家というものは恐ろしいものだということがわかりましたとおっしゃったんです。普通ならモンスターペアレンツですね。たった一週間ですけど、この程度には良くなりましたと。一度も叱りませんでしたよと。そういうところは生一本です。でも、たった一週間と言われたけど、その一週間一度も叱らないでいるというのがどんなに辛いかわかりましたとおっしゃるんです。自分の衝動のコントロールがどんなに大変なことわかりました。お父さん、私がADHDでしょうかとおっしゃいました。私はそうであるともないとも申し上げられませんと言っておきました。でも偉いですよ。一週間でそうなった。生一本の方でしょうね。以後、叱らずにお育てになったようでありました。、つい先頃、十何年ぶりに、まだ一ヶ月も経っていません、二、三週間経ってないほどですが、お母さんから電話をもらったんです。突然でびっくりしました。どうされたんですかと申し上げましたら、私たちの会が主催する講演会に来ていただけないかと言って電話をかけていらっしやったんです。結局、その講演会は日時その他の都合で今回は引き受けられませんでした。それはともかくとして、何ちゃんどうしていらっしやいますかと聞きましたら、お母さん、おかげさまで大学生になりましたとおっしゃった。ある大学のデザイン工学科に入って良い成績なんです。大変喜んで楽しく大学に通っているんですと。あの時、先生に言われて叱らないようにということを守ってきましたとおっしゃった。叱らないだけで、こんなに良い子になるんだと。お母さんの言葉ですが、あんなに一生懸命叱っていたことが馬鹿みただったとおっしゃったんです。良い子にしようと思って、叱りに叱って、注意に注意していらっしやる。ぶったりなんかもなさっていて。叱らないだけでこんなに良い子になるんですねと心からおっしゃいました。夫もそう言っていますと。あの時、先生がおっしゃったことを何かのときにいつも思い出すようにして、夫と十何年、本当に叱らないできました。良い子になりましたとおっしゃいました。一回見せていただけませんかと言いました。今の姿でNHKに出ていただいて、あの時こうだった少年が十何年か経ってこうなりましたという番組が作れたら素晴らしいですね。どんなに多くの方が励まされるか、どんなに怒りっぽかったお父さんやお母さんが怒らない人になれるかということを私は本気で思いました。

叱らないことなんです。穏やかに短い言葉で具体的になすべきことを言ってあげてください。高機能の子どもは確実に高機能を発揮していきます。高機能でなくても持っている力は発揮していけるようになります。本当なんです。ここが皆さんになかなかわかっていただけない。どうしても叱るんですよね。そして、くどくどと長々と、あーだこうだあーだこうだと言い過ぎられるわけです。どれだけこの子達が辛い思いをしているか。いいでしょうか。

結局この子たちは適應力が弱いわけです。言われたから適應できるという問題ではないんです。

脳の統合力が弱いんです。TEACCHはこの子達を我々の世界に適応させるようなことをやり過ぎない。私達がこの子達に適応していくわけでしょ。視覚的、物理的に構造化した環境を作ってあげる。この子達が適応できる状況、学びやすい状況をこちらが作ってあげるんです。叱れば叱るほど、その情報や刺激に振り回されてしまって、ますます統合力が悪くなっていくわけです。せっかく持っている能力も発揮できなくなってしまうということでもあります。

百聞は一見に如かず。これはなにも発達障害の人への言葉ではないんです。私たち向けの言葉です。百回聞くより一回見せてもらったほうがわかりやすいんです。視覚的に具体的に目で見てわかるようにお教えになればいいんです。くどくどと百回も説明するからおかしくなるんです。論より証拠。くどくどと論ずるより証拠を見せてあげてください。象徴的に比喩的に申し上げますとこういうことですよね。情より理屈。こういう我々向けの諺とでも言いましょか言葉がありますが、発達障害の人はこれがより強度なんですね。論より証拠。裁判官には相当発達障害的な人が多いかなと思ったりします。どんなに上手に説明しても、証拠がなければ疑わしいけど罰しません。冤罪を作らないためにもそれはいいと思いますね。証拠をしっかりと作る、固めるということが検察側、捜査する側の大きな勤めですよ。くどくどと上手に論ずることはないんです。発達障害の人は裁判官みたいな人です。弁護士とは反対の人だと思います。仕事をされるなら裁判官、判事ですね。たぶん弁護士や検察にはおなりにならないほうがいいかと思います。この人達は上手にあれこれ口で説明するのは下手です。そして相手のそういう世界にひっぱりこまれることをとても辛く思っていますから。

発達障害の人は自分のやり方で行動するんです。わがままではありません。おわかりいただけますね。

常識が身につけにくいんです。暗黙の了解という世界を持つのは非常に困難ですよ。絶対駄目だとは申しませんが、常識は身につけにくいんです。キャロル・グレイというアメリカの特別支援教育の先生が、発達障害の人に常識や社会活動の取り方を教えるために、短い文章と必要なイラストを入れて作ったソーシャル・ストーリーというのがあります。日本でも佐賀の服巻先生などが一生懸命それを紹介しています。

得意不得意の差が非常に大きいです。そういう特性、個性を持って生まれてきたんでありますから仕方がないです。しばしば非凡なものを持っていらっしやいます。ニュートンやアインシュタインのような非凡という程のものでなくても、優れたものは必ずもっています。だけど、発達が不均衡ですから、劣っているものも必ず持っているんであります。せっかく持っている非凡なもの、優れているものを自分で社会に発揮することは極めて下手です。そこを周りの人が理解して社会で発揮できるように道筋を開いてあげなければなりません。思春期・青年期からはそういうことになります。

思春期・青年期に到達したとき、過去、二次障害をおこすような酷い扱いをいろいろと受けているときは、簡単に次のステップに歩んでいけないですよ。この人達は新しい世界に臆病ですし、そうでなくてもそれまでにたくさん傷つけられているということがあります。その傷を癒しながらということになりますけれども、なかなか消えないですよ。発達障害の特性で最も中心的なものは、

物事を忘れることができないということです。だから傷つけないで下さい。叱らないであげてください。保護者の皆さんにしろ、教育者の皆さんにしろ、施設やその他で指導や支援をしていらっしゃる人にしろ、叱らない。いいでしょうか。

規則、役割、相手の立場を理解するのが下手です。心の理論の発達が悪いと専門的な言葉で言われますが、目に見えない意味を確認することが弱いです。いろんな程度に個人差を持って、規則や役割や相手の立場がなかなか理解できない。

話すことより相手が話すことを理解することが下手であります。最初にお話したとおりです。こんなに話せるならこちらの言うことだってわかるでしょと思うなら、これは発達障害を知らない人のことでもあります。この子はこんなに普通に話せているけれど、周りの人の普通の話や、普通の子供たちや若者たちがどんどんわかっていくようにはならない。苦労しているんだということを知ってあげていただきたい。

何事も字義通りに理解しますから、いろんなことがついていきにくいときがあるんです。比喻や抽象、冗談はいろんな程度に理解できません。横浜のある少年の有名なお話があります。大変能力の高い子です。学校で試験や勉強ということになれば、トップクラスの子です。あるときお父さんがその子に、そろそろ空気が読める子にならないと駄目だよとおっしゃったんです。この子達は読めないですよ。それどころか、そんなふうには取らなかった。場の空気を読めるような子にならないと駄目とお父さんはおっしゃった。その少年はお父さんの頭がおかしくなったと思ったようです。お父さん、駄目だ、空気なんか読んじゃ。空気は吸わなくちゃいけないよと。一生懸命お父さんをなだめたというか、修正したというか。読むのは字だよ、お父さん。字を読みなさい、字を。それはびっくりしたんですよ。空気を読むなんていうことを言ったんです。空気に何を読んでいるんだろう。学校の勉強なら非常によくできる。勉強といった場合、何ができることかというのは難しい問題ではありますけどね。

臨機応変や応用が下手だということはさっきお話した通りであります。だから、鬼ごっこやドッチボールはとても下手です。というより右往左往してしまいます。だけど、神経衰弱やジグソーパズルはとても得意であります。ゲームではボーリングなどが好きです。上手下手は別であります。これは場数を踏まないと上手にはなりません。ボーリングは好きです。決してルールがないわけではありませんが単純です。そして、ある意味、マイペースでできるゲームであります。ノースカロライナに行くと、ゴルフをしている自閉症の青年を時々見かけます。ミニゴルフなんてよくやっていますね。ルールは確かにありますよ。だけど、ゲームそのものはマイペースで、ある意味で単純じゃないですか。そういうことをご承知おきください。

二次障害を防いであげてください。二次障害はとりわけ思春期・青年期におきてまいります。おきてくるというより、そこで明らかになるんですよ。二次障害、情緒障害です。混乱する環境に続けることは、慣れるよりも苦痛や嫌悪が大きくなるだけです。私たちは困難な場面において努力し続けると、困難を克服することができるんです。そして、頑張っただけで困難を克服したときには、感動の大きな喜びを感じることができるんです。しかし、発達障害の人はその困難だけが残ってしまうんです。消えないんです。

ある方はこんなことも教えてくれます。発達障害の人は聴覚過敏だとか言われる。音に対して過敏で嫌悪感を感じると。だけど、それはストレスの強い状況や環境に置かれているときに音がとても気になるということです。辛い思いをするんですと。ストレスの強い状況に置かれていれば置かれているほど、音に対して、騒音に対して、赤ちゃんの泣き声やその他の騒音に対して、とても苦痛を感じる。確かに聴覚過敏になりますと。ところが、音が全然してないところでも聴覚過敏で苦しいことがあります。それは脳が記憶している音がよみがえってくるからです。これも何人もの人が言いました。口で言われたことは消えやすく、目で見ただけが記憶に鮮明に残るんです。嫌なことを言われます。耳で聞いたことだから消えるかという、嫌なことだけは言葉が文字に変わって記憶に残るんですと。まあ、なんて大変な人達だろうとあれこれ思いますよ。とてもストレスの強い状況に置かれると物音がとても気になって苦しみます。聴覚過敏になりますと。ところが静かな場所に行っても、しばしばそれが過去の記憶としてよみがえってきます。脳が覚えていますから。静かなところへ行ったら聴覚過敏が消えるかといったら、そんなことはないんですと。要するに苦しめないであげて欲しい。

ストレスを感じるようなところに追い詰めずに育てて欲しい。もうこれに尽きるんです。できれば思春期になってからではなく、小さいときからずっとそうしていただければそれはいいです。

ノースカロライナの人95パーセントを超えるほとんどすべての人が、なぜあんなに安定して生活していらっしゃるのか。家庭やグループホームを生活の基盤にして、地域社会で生きていらっしゃる。みんな仕事を持っています。高機能の人は一般就労で、高機能でない人の場合は保護就労や福祉就労で。福祉作業所で仕事をしていらっしゃる方もいます。みなさん、余暇活動も楽しんでいらっしゃいます。

昨年、17人の仲間でノースカロライナに行ったとき、是非この問題を尋ねて欲しいと仲間から言われました。強いひきこもり状態になってしまった自閉症の人、あるいは不幸にして犯罪を引き起こしてしまった人、人を殺傷するような犯罪を引き起こしてしまった人達に対してあなた方はどのような再出発へのプログラムを持っているんですかと。この中にも一緒の方がおいでになるかもしれません。思春期・青年期以降の人達の問題あるいは高機能の人達の問題についての向こうの専門家、責任者、主任さんがおいでになれましたが、じっとお考えになって、どう考えてみてもノースカロライナにはそういう人はいないと思いますけれどとおっしゃいました。改めて驚きました。発達障害の人がそういう状態になりやすい人だと思ったら大変な間違いですよ。私達の不注意で不用意で無知でそういう状況に追い込んでしまうことがありがちな人だということになりますけど。発達障害の人はそうなりやすい人だなんて絶対に思わないで下さい。

もし本当に確かめたいと思われたら、ノースカロライナに行って聞いてみてください。いないと思いますがと言われたんです。17人の仲間で改めて驚きました。二次障害をおこさせないですよ。二次障害ですからもともとある障害じゃないんです。不適切な養育、教育、環境によってしてしまうわけですよ。勉強に対する無気力、親や教師に対する反抗、無関係な他者への攻撃、不登校やひきこもり、ストーカー的な行動。自殺願望。こういうようなことでありますね。

最後に、教育指導支援のところをちょっとご案内したいと思います。発達障害の人の問題は、基

本的には治療的に対応するものではありません。発達障害は本来の持ち味、特性です。みんな優れたもの、中には非凡なものを必ず持っているわけですから、それが発揮できるように援助することです。駄目なところ、気になるところを直させようなんて、基本的にはなさないほうがいいです。

よく理解できるようになったこと、あるいはきちんと決められたことがわかれば、融通が利かないほどきちんとさいます。嘘はつきません。決まりはしっかり守ります。犯罪を起こしやすい、ルール違反をおこしやすいなんてとんでもない間違いですよ。その正反対のところにいる人ですよ。よほど酷い仕打ちです。それを続けてきた結果ですよ。それを本当にわかって欲しい。

決まりはしっかり守りますし、適当という感性はありませんから、こういう人に鰻屋さんや肉屋さんで働いてもらいたいですよ。あの人たちは絶対、発達障害ではないです。あんないい加減なことをして。発達障害の人は絶対できないですもん。本当ですよ。発達障害でない人のほうがはるかに社会には有害であります。有害なことをやることがあるということです。発達障害の人は本来少しも有害ではないです。素直な人ですよ。優れた能力は必ずありますよ。それなのに謙虚です。

教育上、重要なことは単純に皆と同じことができるようになるのを目指すことではありません。この子はこれでという道を、しっかり見つけてあげることがとても大切であります。

I Qに合わせて教育をするのではない。TEACCHの人が、二月に京都に来たとき繰り返し言っていました。知能指数が正常だから、あるいは正常より高いから、すべて普通学級の中で教育するというのではないんですよ。教育は知能指数に合わせるのではなくて自閉症に合わせるんですよ。そうだろうと思います。

少し、極端な比喩を申し上げれば、癌の治療は知能指数に合わせてするのではないですよ。当たり前なことだと、おわかりになるでしょう。癌に合わせてするんですよ。その人のI Qが高いから低いからと言って治療の方法は変えません。

発達障害の人の教育は発達障害に合わせてするんですよ。TEACCHの人はいみじくも言いました。発展途上国ほどI Qに合わせてやっている。私達もそういう意味では発展途上かもしれません。

保育や教育の場、学習や生活の場を、視覚的、物理的に整えてあげることです。その人に合わせて作り変えてあげるわけです。環境をいろんな程度に視覚的に物理的に整える。環境の意味をわかりやすくしてあげると言ったほうがいいのかもかもしれません。環境の意味がわからないところで適応できる人なんていませんから。おわかりいただけますよね。

視覚的構造化、TEACCHプログラムなんて言いますと、こちらが管理しやすいように、やりやすいように、この人たちを動かしやすいようにしているんだと言う無知な人がいるんです。これだけ無知なら何も言わなければいいのに。あるいは勉強のために視察に行ってからものを言えればいいでしょう。本当にそう思います。私は自分の知らないことについて、コメントなんてしたことありません。わかりませんとしかお答えできませんもの。わからないのに、あーだこーだものを言う人の気が私は知れません。たぶん、自分のやり方を防衛していらっしやるんでしょうけど、本当に酷いことだと思います。

この人達に合わせてあげるんですよ。目の不自由な人の点字ブロックは物理的構造化です。車椅

子で生活をしていらっしゃる人のために段差をなくしてスロープを作る。エレベーターを敷設する。エレベーターの押しボタンはできるだけ低いところに設置する。みんな物理的構造化でしょ。その環境にこういう障害のある人たちを閉じ込めるために、押し込むためにやっている方法ですか。そうじゃないでしょ。構造化は私達と色々な環境を共有しあうための努力じゃないですか。自閉症の人は何かをしてあげなければ適応できないですよ。私達は環境に適応できない人を、過去にどれぐらい作ってしまいましたか。100万人以上と言われるひきこもりの人がいる。その中の何十%を発達障害の人が占めているかという調査もなされていないです。でもそんなに少ないです。

簡単に申し上げれば時間の推移を視覚的に提示してあげる。どこにいればいいか、何をすればいいか、どれだけすればいいかをわかりやすく。自分がやっている活動、学習や作業の過程、プロセスを自分で確認できるようにしてあげて、与えられた作業なり課題が終わったら、次に何をしたらいいのかということをつもわかりやすく提示してあげる。なにも職員や教育者や我々のほうが一方的に決めるのではありません。本人と話し合っって選択の自由を与えながらわかりやすくしてあげる。これらのことを本人が自分で計画、構成できればそれは申し分ありません。そうでなければ私たちが適切な支援をして、こういう環境や状況を作らなければなりません。

私はこの8月、来月で73歳になります。高齢になってまいりました。高齢者向けの住宅に構造を少し変えております。2階に上がるところにちょっと手すりをつけるとかね。特にお風呂場をいろんなふうにしていただきました。私達が計画したんではないです。地域社会で大変親しく日々お付き合いさせていただいている工務店さんがいらっしゃって、佐々木さん、だいぶお年を召してこられたから、そろそろお家を高齢者向きに構造化したほうがいいと。構造化という言葉は使いませんが、おっしゃいました。高齢というあえて言えば障害のために、我が家を構造化しようということでございます。その環境に自分で自分を閉じ込めるためにやっているわけじゃないんです。そこを快適に活用するためにするわけでしょ。皆さん、だれかがそういうことを言ったら、きちんとその方に説明してあげてください。第一、発達障害、自閉症の人をノースカロライナの人々のように幸せにしてこられましたか、今現在していらっしゃいますかと聞いていただきたいと思いますね。

当事者の方の言葉をほんの少しご案内しておきます。先程もいろいろお話ししましたが、自分達のことを正しく理解してくださいと自由にお話になれるようになるとどの方も言います。理解できないなら指導や支援はしないで下さいともおっしゃる。そうだと思います。理解できないなら傍にも来ないで欲しいと。無理解なまま傍にいて苦しめている人がいらっしやらなければいいなと思います。

理解できない人に傍に来られるだけで、自分達は苦しんでいるんです。無理解な人のところにはいかなくてもよくして欲しい。あるいはその人を立ち去らせて欲しい。あるいは、自分が立ち去ることができるようにして欲しい。無理解な人の傍にすることが、どれだけ辛いことかわかって欲しい。発達障害の人がたいにおっしゃることです。私達のことを理解してください。理解して欲しいでしょうね。いかに長い年月、無理解な人にあれこれされてきたかということ、わかってあげて欲しい。いろいろ難しいことがあって、なかなかわかりにくいところがもしありましたら、叱ら

ないであげてくださるだけでいいです。好き放題をさせるということではありません。先程から何度も繰り返し申し上げています。そんなことしちゃ駄目ですよ、それよりはこうするのがいいですよ。短く、具体的に、穏やかに、繰り返し伝えてあげて欲しいと思います。叱りながら、腹を立てながら言うのではありません。それなら傍に来ないでくださいと。あるいは私たちが立ち去ることができるようになってください。こんなにストレスの強い状況の中に無理やり閉じ込められるようにして引き止められて、とんでもない暴発をすることがありうるのかもしれないということを、ちらっと、どこかに置いておいていただきたい。わからないなら叱らないでいてあげるだけで、この子達は伸びていきます。間違いなく発達していきますから。

後ろを押してあげてください。前に行って舵を取らないことであります。私たちの都合や希望でとんでもない方向にあっちに曲げたりこっちに曲げたりしたくなりますから。それをしないで、後ろを押してあげて欲しい。

デザイン工学科に行くことになりました。お母さんはそんな科があることを知りませんでしたとおっしゃいました。この子が選んだんですと。結構ですよ。小学校のときにあんな状態であったあの少年が。時間さえあれば皆さんにそのVTRやいろんなものを本当は見たい。あんなに酷く混乱した状態でいたあの子が、今、立派な大学生ですよ。しかもよくできると言われていると、お母さんは本当に喜んで誇らしげにおっしゃいました。学校にとても楽しそうに行っているんです。今日めったにいませんよ。楽しそうに大学に通う学生なんて。たいしたものじゃないですか。しかもよくできる。余計なことをなさらないとそうなります。失礼な言い方をしていることは重々承知しています。余計なことをなさらないように。叱らないであげてください。本当にこの子達は悪意を持って悪をするということは絶対ありませんから。真正直ですから。悪意はないんですから。そこを信じてあげて欲しいと思います。

#### 質疑A

A：素晴らしい講演をありがとうございました。私はアスペルガー症候群の当事者のAといます。

先生：そうですか。失礼ですが、おいくつになられましたか？

A：25歳です。

先生：私がお話したところで、ピントがはずれているところがありましたか。これは修正してもらいたいと。

A：いいえ。私も含めてなんです、私の仲間たちは佐々木先生のおっしゃるように、叱られて、もしくは迫害されて、そしてたくさんの二次障害、PTSD、感情のコントロールができないなどで苦しんでいます。そういう人達はどのような支援を受けたいのか、教えていただきたいなと思いました。

先生：なるほど。発達障害、アスペルガー症候群の人は理解者の中でしか適応できないんです。この人は私のことをわかってくれるという人の中でしか安心して適応できないんです。この人達からすれば、自分の方から相手に合わせていくというのは本当に大変なんです。周りが理解して合わせ

てあげてくださらないといけないんです。理解者の中だけでしか、安定した発達あるいは適応はないということを知っておいてください。理解者に恵まれなければいけないんです。

今おっしゃった質問に一言で答えるなら、この人達を彼らのことをよくわかっていると思われる環境や状況へ置いてあげていただきたいということです。そういうところへ行けるようにしていただきたい。学びの場でも余暇活動の場でも働きの場でもですよ。日常生活の場でも。何度も繰り返します。この人たちの言いなりになって甘やかせるということとは全然違いますから。そんなふうにご理解することは決してなさらないで下さい。私達がこの人達を理解してどのように合わせてあげることができるか。ご本人はこういうことを自ら上手に周りの人に要求できないですよ。自分のわがままを言うようであって。私たちが理解して先回りして、そういう場や環境、状況を作ってあげる努力をしなければいけないんです。

そういう場に恵まれれば本当に良い仕事をされます。楽しそうに余暇活動もなさいます。余暇活動と言っても視覚的な世界、あるいは、規則や法則がしっかりしているような世界。端的に申し上げると手芸の世界のようなもの。私の知っている人の中には、手芸の名人がいます。書道の名人もいます。つい先だって書道の毎日なんとか展というのに高いレベルで入選されたので、展覧会に見に来てくださるとご案内をいただいたのですが、時間が取れなくて本当に悲しい。そういう青年がいらっしゃるんです。小さいときからお会いしていたんです。手芸の名人もいますよ。大変に優れた能力を手芸で発揮されます。なにも高い能力を発揮しなくてもいいんです。楽しく能力を発揮される世界ですね。どんな世界でもいいんです。お料理が好きな人もいます。ちゃんとレシピの手順を追っていくということが頭に入れば、とても上手にお作りになります。

周りに理解者がいてくれて、その中でちゃんと自分の活動ができれば、仕事であれ余暇活動であれ、その他のことであれいいです。そういう場を皆さんが協力して与えてあげることができるようにしていただきたいと思いますね。

苦労していらっしゃるんです。本当に辛い思いをしてこられたということがおわかりになると思います。なかなか私達のほうから理解してあげることが難しい世界でもありました。こういう時代になって、今もそんなことを言っていたらおかしいですよ。そんなことでよろしいですか。周りの人に手伝ってください、助けてください、協力してください、理解してください、わかってくださいということをしっかりおっしゃるといいですね。そうやって協力してくださる人を一人でも二人でも何人でも求めていかれるといいと思います。

## 質疑B

B：今日、どういう立場から参加したかを言うのに、告白するのを非常に悩んだのですが、たぶん夫が発達障害であるのではないかと最近気づきだした主婦なので、名前を言うのははばかれます。問題行動としては、1歳の子どもが家で騒いだり予想もつかないことをやはりするのですが、それに対して父親である彼はパニックになってしまうんです。

先生：お父さんのほうがパニックになる？

B：なんで泣くんだ、なんで騒ぎ立てるんだということで。私達家族は今、一緒に暮らすことが非

常に困難なんです。私のほうが発達障害ではないかということにいろんなことから気づきまして、学習して夫に話したり、いろんなことをするとうまくいくような気もするんですが、ちょっと対応が難しくて。小さい子がいるというのはやはり難しいのでしょうか？

先生：いや、そんなことはありません。ご主人に具体的におっしゃってね。あなた自身は能力を持っているし、私自身もそのことはよくわかる。立派な仕事をなさっているでしょう。だけど、こういう弱点も一方では持っている。日本では発達障害という言い方をします。Developmental Disordersですけどね。障害というと皆より劣っていて駄目という意味にイメージされるといけませんけど他に良い言葉はないからというふうにお伝えになるといいですよ。こういう特徴、特性を持っていて、優れたところが必ずあるけれど、予期しないことが起こるのが苦手な辛いんですよ。赤ちゃんはいつ泣くかわかりません。予定を立てて泣いているわけではありませんからね。職場でもそういうことがあるでしょう。日常生活の他の場面でもそういうようなことがあったでしょう。発達障害の人は物事が予期した通りに、計画通りに進んでいく、あるいは計画の速度が遅くても速くてもある方向に秩序立って進んでいくようなところで、大変高い能力が発揮できるんですけども、予期しないことが起こるたびに、とても辛い混乱を起こすんですよ。だからあなたがそうだということは仕方がないし、悪いことではないからと。そう思えたら赤ちゃんの傍にはちょっといないほうがいいんじゃないですかと言ってあげてくださればいいですよ。赤ちゃんが泣き始めたらあやしてくれなくてもいい。泣き静まるまで、泣きやむまで、自分の部屋あるいはどこか部屋を決めて、そこでちょっとくつろいでいたらいいんじゃないですかと。こうしたらいいと私は思いますが。そして仕事場でもその他の所でも発達障害である有利さや優れている面がきつとあって良いお仕事をなさっているんでしょうけど、一方で発達障害であるために、先程からずっと申し上げてきたようないくつかの問題があって大変だったでしょう。苦しんできたでしょう。時にはなかなか皆と調和できずに、自分は浮き上がっているような気がするという人もいたりします。自ら調和できないで苦しんでいると言う人もたくさんいるんだと。今日そういう人がたくさんいるということがわかってきました。あなたもそうだということがわかった。そういう個性、特性があるんですよと言ってあげてくださればいいんです。アトピー性皮膚炎の人、あるいは杉花粉症の人が増えてきました。数ではそんなに目立たなかったり、気にならなかったけれど。発達におうとつがあると言いますか、発達が不均衡な人がいるということがわかりました。そういう人達ができるだけ穏やかに幸福に生活していけるように、周りが理解するというところでやっていきましょうとゆっくりお話になればいいと私は思いますが。

B：ありがとうございます。勇気ができました。説明してみます。

先生：そうしてあげてください。